

高等学校

平成 10 年 度

教育研究員研究報告書

芸術（美術）

東京都教育委員会

研究主題

美的体験活動を通して、自己表現力を高める授業の工夫

目 次

I	主題設定の理由	1
II	研究構想図	1
III	自己表現力を高める授業の工夫の視点	2
IV	研究事例	
1	ピンホールカメラの制作と撮影	3
2	鑄造——アルミやピューター合金を溶かしての作品づくり	8
3	コラグラフ——社会に目を向けた作品鑑賞と制作	12
4	最初の授業——美術の授業の導入として	16
5	自己を見つめる——ブックカバーデザインとポスター制作を通して	20
V	研究のまとめ	24

平成10年度

教育研究員名簿 芸術（美術）

学 区	学 校 名	氏 名
第2学区	都立新宿山吹高等学校	木村 英 憲
第5学区	都立晴海総合高等学校	大高 利 之
第5学区	都立足立新田高等学校	安 茂
第8学区	都立羽村高等学校	飯田 昭子
第10学区	都立府中西高等学校	浜 順一郎

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課 杉 本 昌 裕

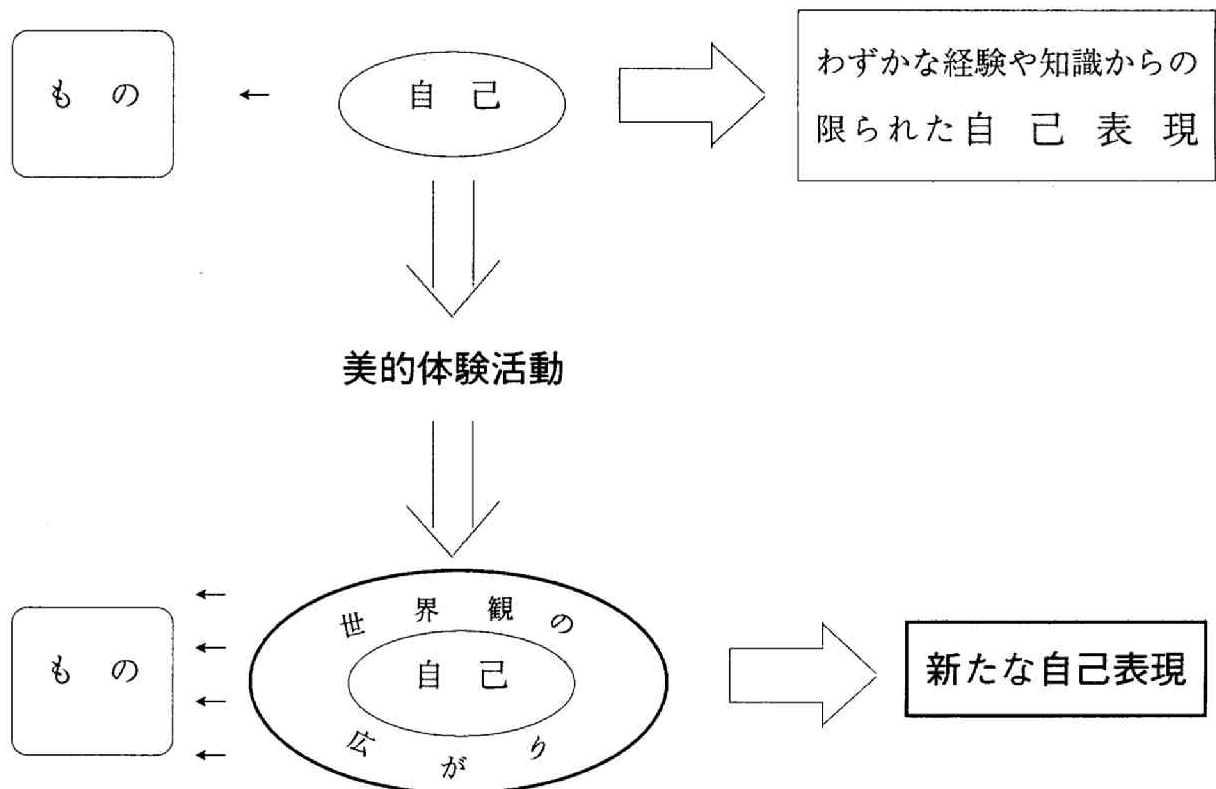
I 主題設定の理由

今日の高校生は、自己主張は強いが自己を豊かに表現する力が乏しいと言われることがある。さまざまな情報やこれまで得た知識を自らの力として活用できず、固定的な観念でものごとを見、判断することも多い。美術の学習においても、自然や崇高なものなどに接して思考し、感じ取り、創意工夫しながら表現していく行為が希薄になりがちである。

美術の学習は、美術の諸活動を通して、一人一人が自己を見つめ、それを表現して確かめ、高める、主体的な美的体験活動であるとともに創造活動である。

本研究では、美的体験活動の中でも、「ものの見方」を広げること、さまざまな素材や技術と関わること、自己と他者との関わりを重視した授業を工夫することで、自己表現力を引き出し、さらに新たな自己表現へと発展できると考えた。また、各学校の生徒の実態も踏まえて研究を進めることで、具体性を持たせ、実践的な研究にすることをねらいとした。

II 研究構想図



Ⅲ 自己表現力を高める授業の工夫の視点

題 材 名	具 体 的 な 美 的 体 験 活 動	工 夫 の 視 点
ピンホールカメラ	・生活の中の映像の理解と再認識 ・映像の原理の理解と応用 ・写真を使った構成	○感動体験 ○技術・技法の理解と応用 ○応用力 ○自己表現力
鑄 造	・金属の性質（材質感）と溶解の体験 ・鑄造技法の理解と体験 ・金属の特性を生かした新たな形体の追求	○感動体験 ○技術・技法の理解と体験 ○応用力 ○自己表現力
コラグラフ	・作品にこめられた作者の感情やメッセージの理解と表現への広がり ・さまざまなテクスチャーを生かした触覚的な版画（コラグラフ）の体験と応用 ・表現意図を明確にするための画面構成	○鑑賞力、心に感じる力（感性） ○技法の理解と応用 ○応用力、表現力
最初の授業	・手、目、感覚、記憶などの働きについての理解のための体験学習と再認識 ・描くこと、表現することについての理解と再認識	○感動体験 ○ものの見方を深める ○自己表現力
自己を見つめる	・自己の観察、探究 ・発想・構想での創意工夫 ・視覚伝達デザインの表現方法の理解 ・平面デザイン技法の基礎理解と多様な材料の活用	○表現意図の明確化 ○材料、技法の理解と個に応じた活用 ○自己理解、他者理解 ○自己表現力

Ⅳ 研究事例

ピンホールカメラの制作と撮影

1 題材設定の理由

本校は総合学科であり、美術系の選択科目を数多く設置している。その中に「映像」があるが、年間計画は次のようなものである。

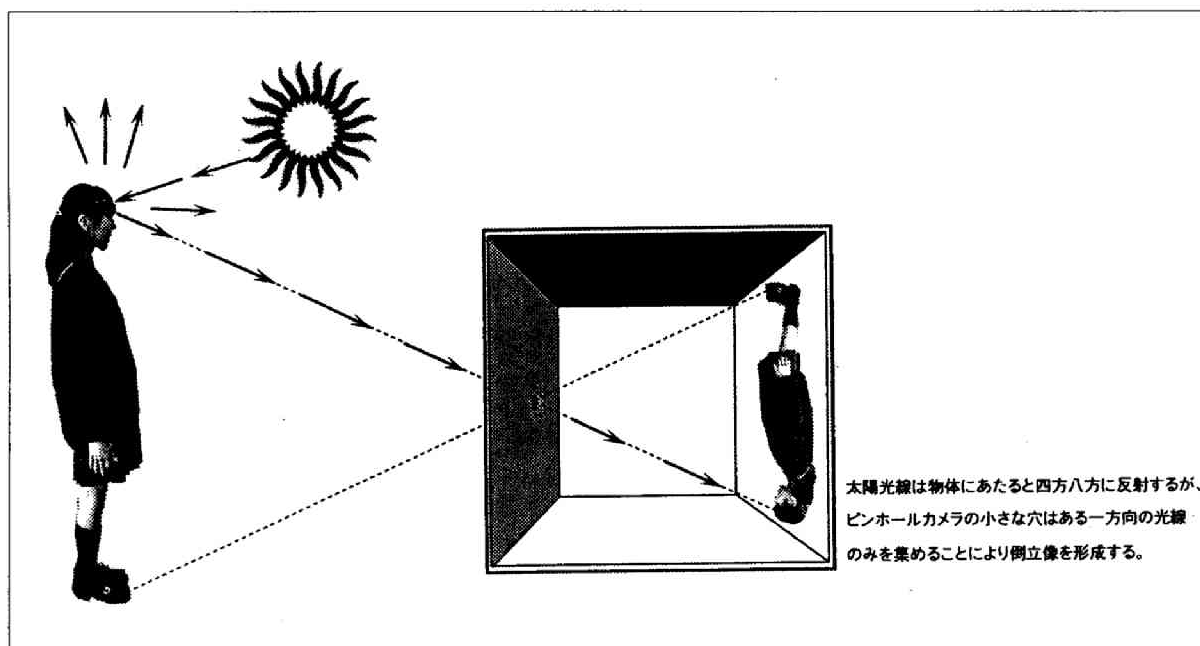
題 材 と 学 習 内 容 (年 間 計 画)	
1	オリエンテーション・・・・・・・・・・写真の歴史についての学習及び作品鑑賞
2	ピンホールカメラについて (1) ピンホールカメラ制作 (2) ピンホールカメラによる撮影及び現像
3	一眼レフカメラの原理と構造及び操作方法について
4	一眼レフカメラを使って・・・・・・・・(1) 撮影練習 (2) 被写界深度の学習 (3) シャッタースピードによる写り方の違い (4) テーマ写真・・・・テーマにそった撮影実習
5	作品アルバムの整理と鑑賞
6	写真現像の体験・・・・・・・・・・(1) 白黒フィルムによる撮影 (2) 現像に使う薬品の作成とフィルム現像技術演習 (3) フィルムの現像 (4) 暗室実習及びコンタクトプリントの作成 (5) 引き伸ばし機の操作実習 (6) 印画紙への焼きつけ及び現像
7	コンピュータによる写真加工・・・・(1) 写真加工用のソフトの操作 (2) コンピュータへの写真の取り込み (3) コンピュータによる写真の加工
8	「動く映像」・・・・・・・・・・(1) 動く映像の歴史についての理解と作品鑑賞 (2) アニメーションの制作体験 (3) アニメーションのコマ撮り撮影 (4) 試写会及び講評会

映像の授業では、興味・関心はあるのだが、映像の概念や理論が分からずに、意欲的に活動できない生徒も少なくない。特に、映像とは見たものをそのまま写し出してしまうという既成概念が生徒にとっては強いため、自己表現力を高める上での障壁となっている場合も多い。

本研究では、空き箱を利用してピンホールカメラを制作する。ピンホールカメラは、だれでも簡単に作れるカメラで原始的な構造ではあるが、映像の原理を理解するには最適の教材と考える。そして、つくり方次第では多様な表現が可能のため、映像について理解し、応用できる教材である。この題材を通して、映像が生徒にとって新たな自己表現の手段になると考え主題を設定した。

2. 展開例

映像とはそもそも物を直接見るのではなく、何らかの媒体を通して二次的に見える虚像のことを言う。紀元前4世紀頃、小さな穴から入る光によって倒立像ができる現象をギリシャのアリストテレスが記録している。まさにこれが世界最古の映像の記録であり、映像の原点でもある。そして、この原理を利用したのがピンホールカメラである。ピンホールカメラの構造は現在のカメラと基本的には同じである。小さな穴の部分レンズに置き換えたのが現在のカメラである。ピンホールカメラは現代のカメラの原点と言える。



(1) 本体の製作

ピンホールカメラの本体は菓子の空き箱等を利用する。この時、光の透けない材質の箱を選ぶのが重要となる。どんな形の箱でもよいが、深い箱ほど望遠レンズのカメラになり、浅い箱ほど広角レンズのカメラとなり、写りに違いが表れる。

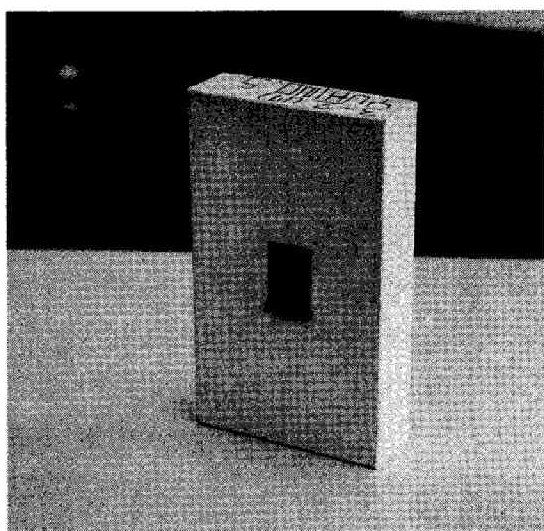
この箱に針で穴をあけるわけだが、穴はレンズの役目をするので精度を高める必要がある。そこであらかじめ箱に2～3cm四方ほどの大きめの穴を空け、その穴にアルミホイルを貼り、そこに針で穴を空けるという手法を使う。アルミホイルは光を通さない上とても薄いので、直接箱に空けるよりも精度の高い穴が空けられる。穴の大きさは、大きい穴ほどソフトフォーカスをかけたようなようなぼやけた作品となり、小さな穴ほどシャープでクリアな作品となる。

次にシャッターが必要となるわけだが、
まともに制作すると機構が複雑で制作が困難になるため、黒いビニールテープを穴に
その都度つけたりはずしたりするということ
でシャッターの代用とした。

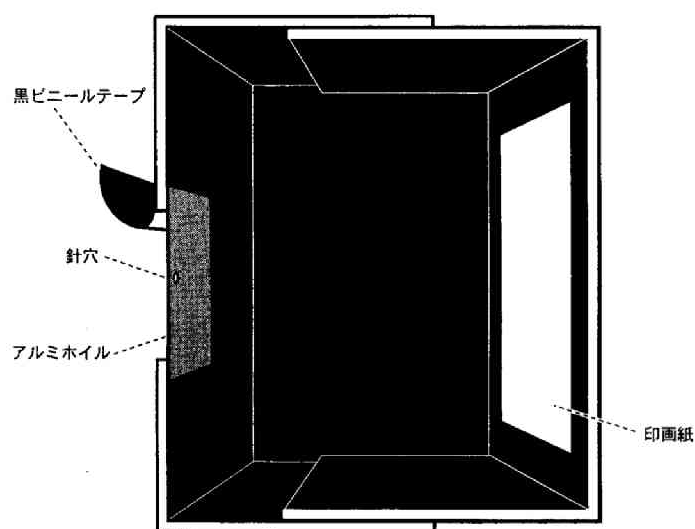
最後にフィルム代わりとなる印画紙（参
考：フジプロ WP FM2 キャビネサイズ）
を暗室内で箱の底の中心に貼り付け、蓋を
しっかり閉めて完成となる。



アルミホイルに針で慎重に穴をあける



完 成 品



ピンホールカメラ図解

(2) 撮影

レンズを持たないピンホールカメラはシャッタースピードが非常に長くなるので、撮影はなるべく明るい屋外で行わせた。それでも晴天時のシャッタースピードは以下のように長い時間となる。また焦点距離の長い（底の深い箱で作った）ピンホールカメラほどシャッタースピードはさらに長くなる。穴の大きさにも左右され、小さな穴のカメラほどシャッタースピードは長くなり、また大きい穴ほど短くなる。

※引用：「母と子の針穴写真」田所美恵子著

カメラの奥行き	38mm	54mm	77mm	108mm	154mm
晴天時のシャッタースピード	16秒	32秒	1分	2分	4分

生徒には時計を見ながら、ビニールテープのシャッターをはずした時から再び穴に貼り付けるまでの時間をはからせ、適正なシャッタースピードになるよう指示した。撮影中は少しでもカメラを動かすとブレた作品になってしまうので、カメラをしっかり固定できる安定した場所での撮影を勧めた。

(3) ネガの現像

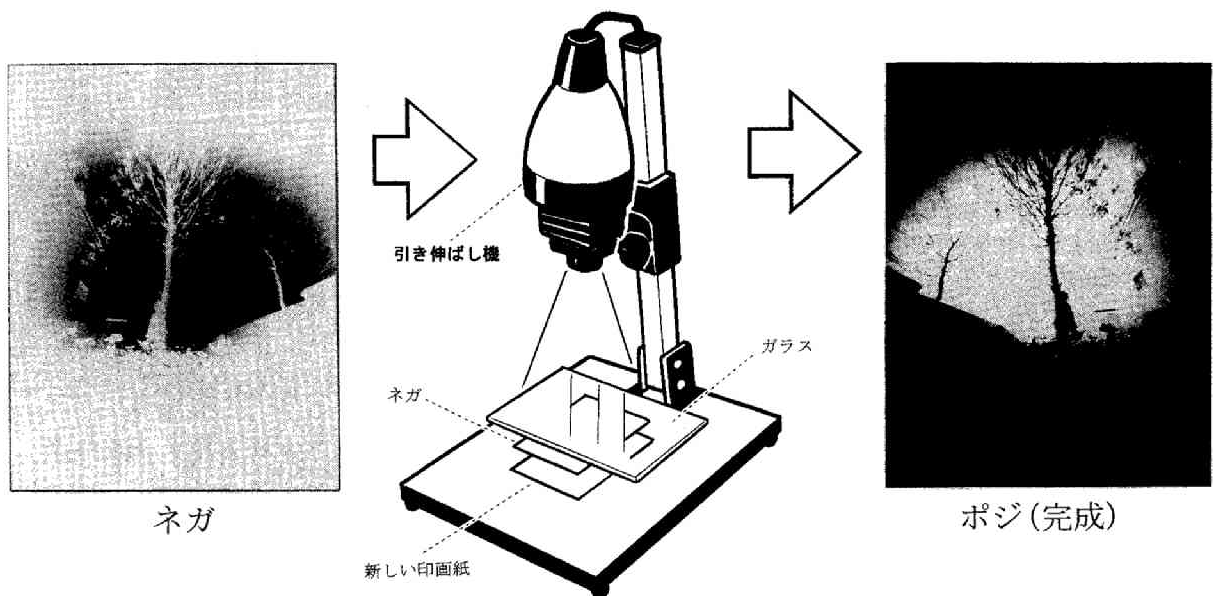
撮影の終わったピンホールカメラはただちに暗室に持ち込んで中の印画紙を取り出し、現像を開始する。手順は現像液（90秒）→停止液（60秒）→定着液（5分）→水洗（10分）の順に印画紙を浸し、最後は自然乾燥させる。

授業風景（印画紙の現像）



完成すると光の当たった明るい部分が黒く変色し、当たらなかった暗い部分は白く残る。これがいわゆるネガとなり、普通の写真でいうところのフィルムとなる。

(4) 反転＜ポジ＞の作成＞

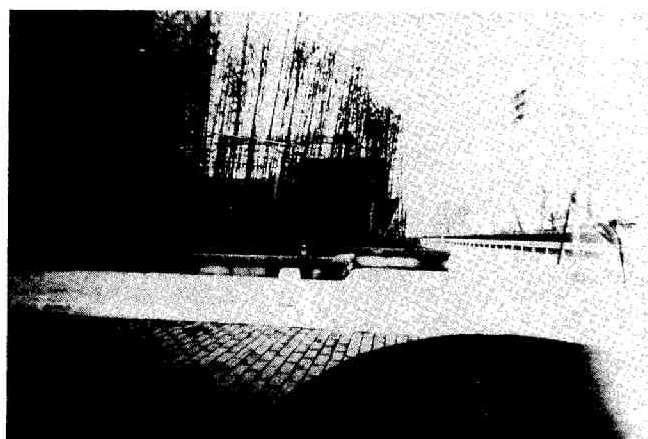
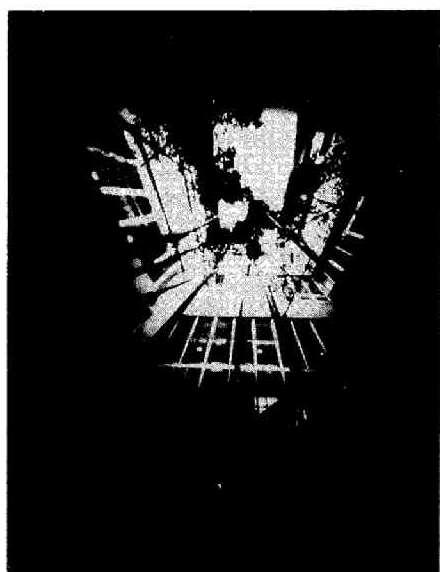
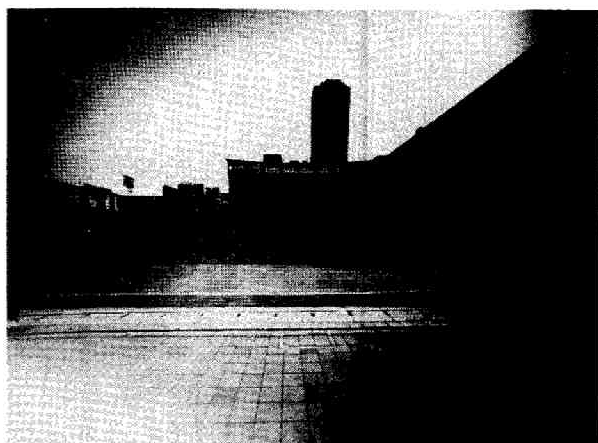


この作業も引き続き暗室で行う。

図のように新しい印画紙の上に現像したネガを重ね、その上にガラスを乗せて密着させ、真上から光を数秒間当てる。光源は何でも構わないが、今回は本校の暗室に設置してある引き伸ばし機の光源を利用した。

この後ネガの現像の時と同じ手順で現像を行うとポジ像が完成し、一連の作業が終了する。

(生徒の作品)



3 考 察

作品を見ると分かるように、ピンホールカメラは現代のカメラとはひと味違った、柔らかな風合いの独特な写り方をする。穴の空け方や箱の大きさの違いによっても、写り方は微妙に変化する。映像とは、必ずしも見たままではないということが発見できるはずである。そして、生徒にとって、この授業が映像の学習の入り口となり、新たな自己表現の世界を可能にすると考える。

今後の課題として、施設と選択人数について触れておく。「映像」の選択希望は、本校において50名弱であり、2クラスに分けて授業を行っている。20名を越える人数がいるのに対し、現像する暗室に6～7名収容するのが限界で、現像セットも一つしか置くスペースがない。しかも、水まわりの施設もない。生徒のニーズに合った暗室が必要である。

時代の流れを考えると、これからはますます「映像」を設置する学校が増えることが予想される。この科目は、施設面での充実が不可欠であることを本研究の成果の一つとして上げておく。

鑄 造 ———アルミやピューター合金を溶かしての作品づくり———

1 題材設定の理由

本題材の研究校では、無気力感から授業に積極的に参加しない生徒がクラスに数名見られ、他の生徒にも影響を与えて活気のない授業になることも多い。この改善には、授業へ参加するような教材、題材の選択が特に必要である。

本研究は、まず体験活動から生徒の興味・関心・意欲を引出そうと考えたものである。金属の溶解は生徒に「美しさ」や「神秘さ」を実感させることができる。また、高熱で溶解した金属を装飾品や造形作品として完成させる工程にも、意欲を持続させられる。さらに、装身具として飾れたり、生活に生かせる点からも成就感・満足感が得られる。

授業全体を通して、生徒が満足感を持つことで、造形の楽しさを知り、新たに追求する気持ちを引き出し、自己表現力を高めることができると考え題材設定の理由とした。

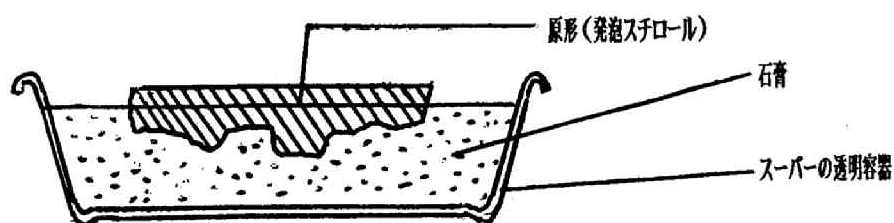
2 研究の経過

試作を繰り返し、次の2課題で授業研究を進めることとしたが、それぞれの特徴をまとめる。

課 題	原 型 材 料	融 解 金 属	作 品 形 状	題 材 の ポ イ ン ト
A	発泡スチロール	アルミ	レリーフ	身近な素材の活用
B	ロストワックス	ピューター合金	立 体	完成度、扱い易さ

(1) 課題Aの制作の手順と材料・用具

- ①原形をつくる・・・発泡スチロール、カッター、紙やすり、発泡スチロール用接着剤
- ②形状を工夫する・・・材料の特性からレリーフ状の作品を制作
- ③石膏型をつくる・・・スーパーマーケット等の透明容器に鑄造用石膏を入れ、その中に原型を入れ、雌型をつくる。
- ④石膏型の乾燥・・・○自然乾燥（2～3日置いておく）
○ガスコンロの上で弱火で1時間ぐらい焼く。（水分を無くす）
※発泡スチロールはこの時抜ける。

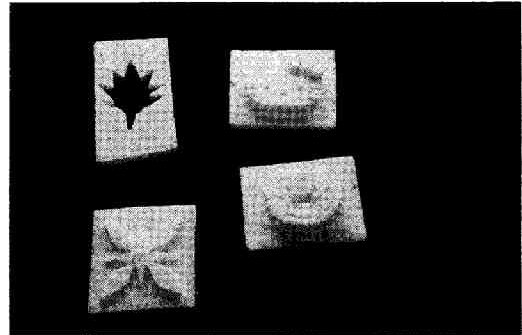


〈石膏への埋没断面図〉

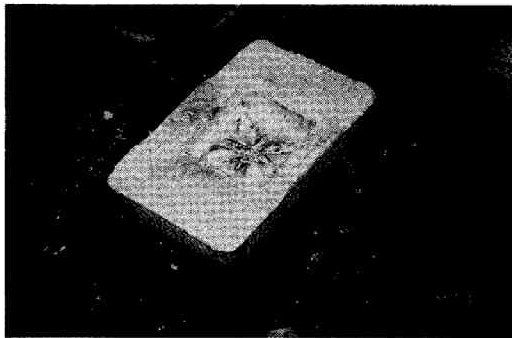
- ⑤アルミの溶解・・・・・・黒鉛ルツボでアルミを溶解する。電気窯を使用（700℃）
- ⑥石膏型への流し込み・・・・・・ヒシヤクで流し込む。
- ⑦作品の取り出し・・・・・・石膏型を壊して作品を取り出す。
- ⑧仕上げ・・・・・・耐水ペーパー、金工ヤスリを使って修正



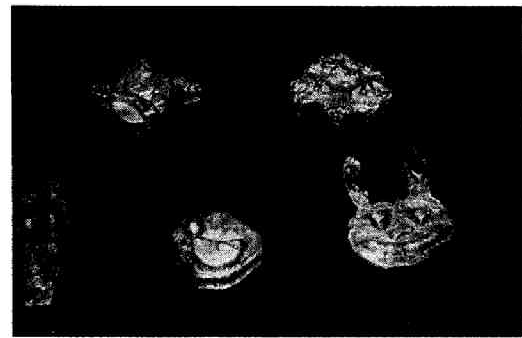
（発泡スチロール成形のようす）



（発泡スチロールの原形）



（石膏型を焼いている）



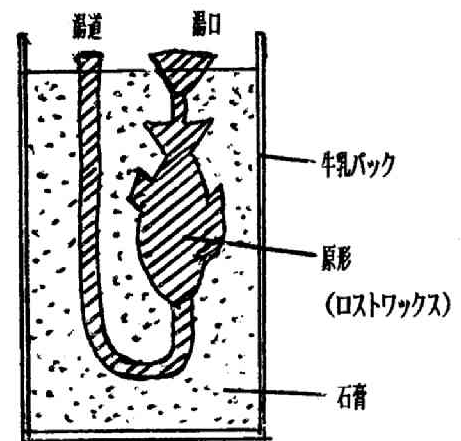
（アルミによる完成作品）

（2）課題Bの制作の手順と材料・用具

- ①原形をつくる・・・・・・ロストワックスをアルコールランプで温めながら成形する。
- ②細部の成形・・・・・・熱した針金や釘を使って成形。
- ③石膏型をつくる・・・・・・ピューター合金は、細部まで流れ込むので、立体作品にできる。その際、湯道と湯口をつくる必要がある。
- ④石膏型の乾燥・・・・・・○自然乾燥（2～3日置いておく）
○電気窯で400℃位で2時間ぐらい焼く。



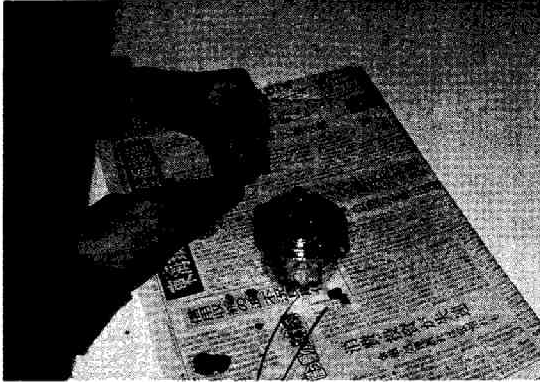
＜ロストワックス原形と湯口、湯道＞



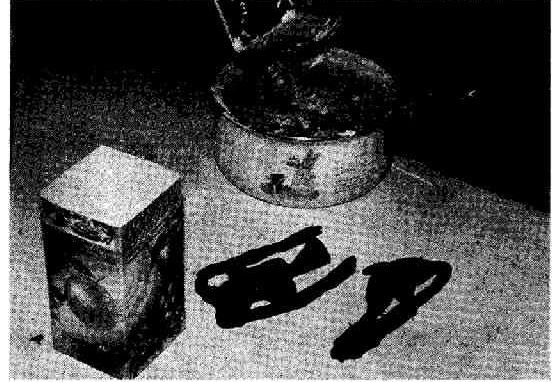
＜石膏への埋没断面図＞

※ロストワックスは、溶解して揮発消失する。

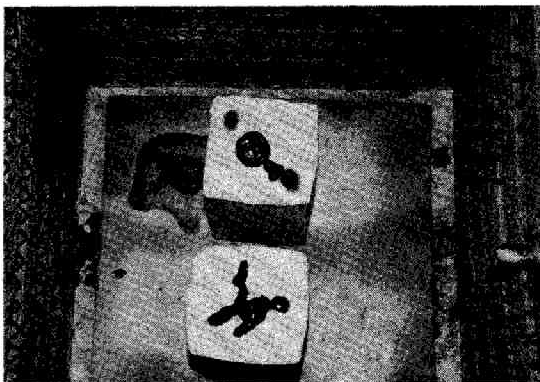
- ⑤ピューターの溶解・・・コンロの上の小さな鍋にて、300℃位で溶解する。
- ⑥石膏型への流し込み・湯口よりピューターを注ぐ。
- ⑦作品の取り出し・・・石膏型を壊して作品を取り出す。
- ⑧仕上げ・・・・・・・・湯道と湯口を切り離し、耐水ペーパー、金工ヤスリを使って修正。



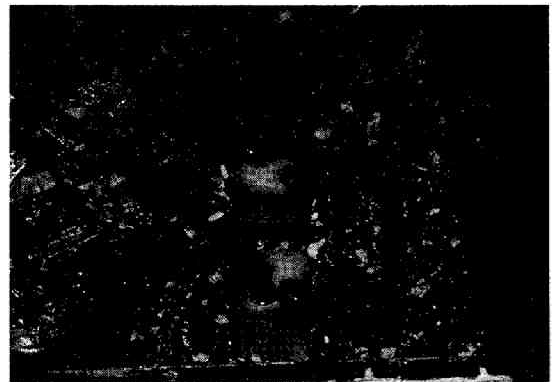
(ロストワックス成形のようす)



(原形に湯道や湯口をつけたところ)



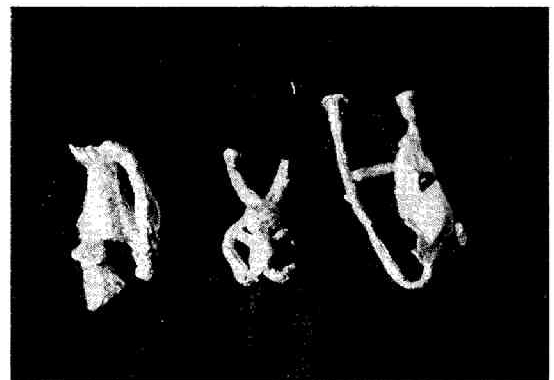
(電気窯で石膏型を焼いている)



(湯を注いでいる)



(砂場の中で石膏型をこわしている)



(鑄造を終えた作品)
—湯道、湯口がついている—

【材料・用具、技法について】

- * 石膏型の加熱乾燥…型に水分が残っていると、高温の金属湯を注いだとき、水蒸気爆発をおこすので危険である。
- * 鑄造用石膏…耐火性の石膏で、普通の型どり用焼石膏とは違う。(しかし、扱い方は同じ)
- * ロストワックス…蜜ろう、パラフィン、松脂を配合したもの。(水を含んだ石膏皿に、溶かしたロストワックスを流し、3～5 mm厚の板状にして使用した。)
- * ピューター…錫(すず)を主成分とした少量の銅とアンチモンを加えた合金。

3 考 察

■ ブロンズ(青銅)にされた作品には、金属のもつ堅牢性、重量感など色々な魅力的な材質感があり、屋外にも置くことができる。だが、ブロンズは、技術的な問題や材料費の問題で学校でつかうのはむずかしい。

そこで、ブロンズではなくても、何か金属に作品を置きかえれないかと思っていたが、以前にアルミ鑄造ということを知っていたので、身近にあるジュースのアルミ空缶を利用して、作品づくりを行えないかと考えた。試みに、校内のアルミ空缶を100個くらい集め、つぶして、ルツボへ少しずつ入れて、電気窯で加熱すると、アルミ缶が融けてルツボの底に湯がたまっていた。しかし、融けるまでは、缶についている塗料や糖分が燃えて、すごい煙と悪臭がでた。このため、授業で使うアルミは、市販のものを使うことにした。

■ アルミで生徒作品を鑄造しているうちに、アルミの湯が細部までまわらないことに気づき、教材用のピューター合金を用いるように変更した。また、アルミではレリーフ状の作品だったものを、ロストワックスを用いて立体作品を制作するようにした。ピューター合金は、アルミに比べ、鑄造性に優れていて、細部まで原形の復元ができることがわかった。

■ 最初、鑄込みは、床にベニヤ板を敷きレンガの上で行っていたが、湯をこぼしたり、または石膏型に穴があいて、湯がこぼれたりした。そこで、砂場の箱(キャスト付き、80×100 cm)を作って、その中で行うことにした。砂の中に石膏型を埋められるために安定性がよくなり、授業がやりやすくなった。

■ 鑄造の授業は、生徒全員が初めてであり、興味・関心をもってくれた。設備や安全面を考慮すると、作品の大きさが少なくなり、生徒各個人の独特な形体追求までは高められなかった。しかし、発砲スチロール、ロストワックス、石膏、など多くの素材をあつかう経験ができたことは、ものづくりという点で新たな広がりを持つことになり、今後の制作に意欲を与えることができた。

■ ロストワックスによる技法は、我国の飛鳥、白鳳時代の小品の金銅仏の制作技法と同じものであり、昔の人の高度な技術の理解につながり、鑑賞にも役立つ。

■ 土間のあるような教室があると、鑄造の授業はもっとやりやすかったし、他の教材開発が可能になるものと思われる。アルミ空缶という身近なものをリサイクルし、牛乳パックやスーパーの透明容器等を利用して制作する授業を行えたことは、ものづくりを身近なものとする上で良かった。今後はさらに工夫をして、装身具の制作や金属の特性を生かした形体の作品づくりを行ってみたい。

コラグラフ ——社会に目を向けた作品鑑賞と制作——

1 題材設定の理由

本題材の研究校では、自分の意見や考えを積極的に表現できる生徒がいる反面、さまざまな力や良い考えを持っていながら、自信のなさからそれらを表にうまく出せない生徒も多い。美術の授業の中でも、生徒の考えや思いを引き出すような題材の工夫が必要である。

本題材では、社会問題と関わりの深い作品を作者の表現意図を重点に鑑賞し、自分の思いやメッセージを作品に表現していく。生徒はテレビや新聞、社会科の授業などで社会問題についての知識をかなり得ていて世界の紛争や災害、身近な環境問題などについて高い関心を持っている。こうした知識を生かし、それらの問題に対する自分の思いや考えを視覚的に表現していくことができたなら、生徒は自信を持つことができると考える。また、鑑賞と制作を組み合わせることによって、芸術に対する見方を広げ、より豊かな自己表現力を引き出すこともできるとも考え、本題材を設定した。

2 展 開

(1) コラグラフについて

厚紙や板、金属板などの上にボンドや砂、布、糸などを用いてコラージュを施し版を作っていく技法。深い線やエンボスを持ち味とする反面、プレス圧力によって版が壊れやすく枚数をたくさん刷るには大変弱い版画である。ボンドだけで版を作ったり、さまざまな方法がある。今回は厚紙の上にジェッソやモデリングペースト、ボンド、布、糸などを貼り凹版としてプレス機で刷る。



生徒作品「戦争の目」

◆ コラージュを基にして版を制作していくので、生徒にとって容易に取り組める。

◆ さまざまなテクスチャを生かした刷り上がりの効果が表現への手助けとなる。

(2) 評価の観点

鑑賞

- ・各作品の作者の思いやメッセージを感じ取ることができたか。
- ・作品の技法や表現手法についても理解できたか。

コラグラフ

- ・制作意図を明確にすることができたか。また、十分に考えたか。
- ・各素材のテクスチャを生かし、自分なりの工夫を行っているか。

(3) 材料・用具

コラグラフ

- ・厚紙（白ボール紙、厚いもの） ・エッチング用インク ・エッチングプレス機
- ・版画用紙（プレダンなど） ・筆 ・刷毛
- ・新聞紙 ・布（インク拭き取り用） ・ペインティングナイフ
- ・貼る素材（ジェッソ、モデリングペースト、ボンド、シェルマチエール、アルミ箔、網、ガーゼ、ひも、糸、スタッフ、麻布、ドライフラワーなど）

鑑賞

- ・参考作品（画集、カタログ、教師作品） ・テレビ、ビデオ ・教師作成プリント

(4) 指導の実際

制作1・・・ コラグラフを体験し技法を理解する。

鑑賞・・・ 社会問題と関係の深い作品を鑑賞し、芸術に対する見方を広げ、作者の思いやメッセージを感じ取る。

制作2・・・ 社会問題に対する自分の思いやメッセージを作品に表現する。

制作1

コラグラフ参考作品（クラベ・アントニ、アリソン・ダン、教師作品を見せ技法を説明する。「コラグラフを体験してみよう」と声をかけ試作品を作らせる。



版制作と乾燥



ボンドを塗る



刷り

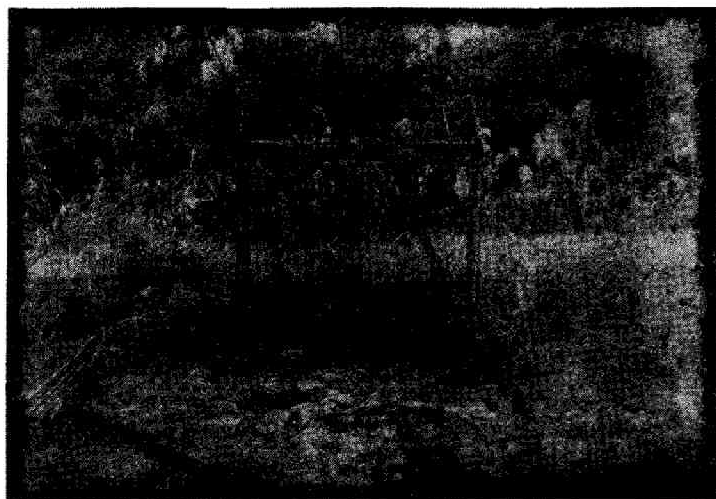
モデリングペーストやジェッソを塗り重ねたり、さまざまな素材を自由に貼っていく。引っかいたりしても面白い。

乾燥後、画面の保護とインクの染み込みを防ぐため、布やひもなどにボンドを塗る。

エッチングインクを詰め凸部のインクを拭き取る。拭き取り加減で刷り上がりが変わってくる。

鑑 賞

ビデオで画集やカタログの作品をテレビに写し、説明。教師作成の鑑賞用のプリントで問いや作業を行い、さらに内容の理解を深めていく。



《杉並区阿佐谷南3丁目23-13 へ 普賢岳「地一開」》

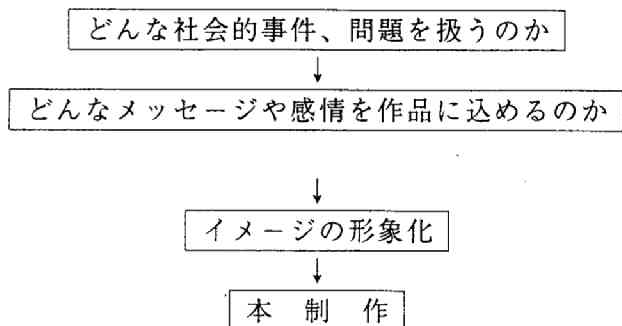
〈 鑑賞作品 〉

作品名 と作者	関連する社会事象	鑑賞のポイント
《杉並区阿佐谷南3丁目23-13 へ 普賢岳「地一開」》 大浦一志 作	雲仙普賢岳火砕流 1991年(作者は一つの 新聞記事を見て普賢岳 へと向かった。)	作者にとって「見る行為」とは どういうことか
「ゲルニカ」パブロ・ピカソ作	スペイン内戦 1937年	作者のメッセージ、構図
「原爆の図」丸木位里・俊 作	広島原子爆弾投下	作者の思い、表現様式
「人質」ジャン・フォートリエ作	第2次世界大戦	作者のメッセージ、フォルム

◆ 鑑賞後、過去から現代に至る社会的事件や問題を思いつくままあげさせ、特に気になる事柄について各自の思いや考えをまとめさせる。

制作 2

1 作目の各素材ごとのテクスチュアの効果を確かめさせ、用意したプリントにそって表現意図を明確にさせていく。鑑賞用プリントで生徒からでてきた社会問題等を紹介し、参考にさせる。



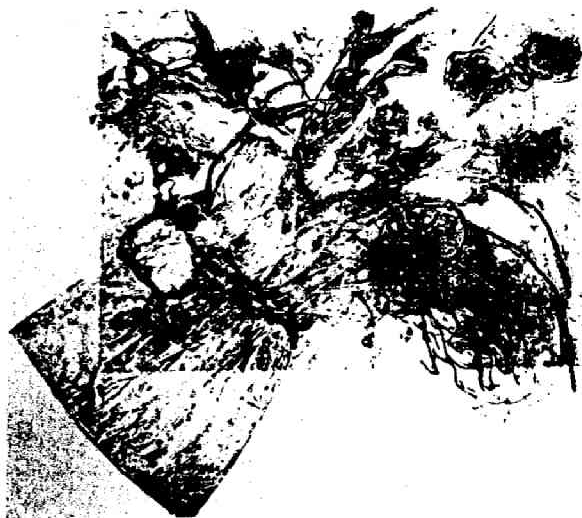
紛争、経済不況、いじめ、環境問題、震災、少年犯罪 など

怒り、悲しみ、反戦、平和、祈りなど具体的に考えさせる。

隠喩やストレートな感情表現など、自分の感情やメッセージを版に示していく方法を参考作品などで例示し、十分に考えさせる。

◆ 効果的な画面構成を検討させる。

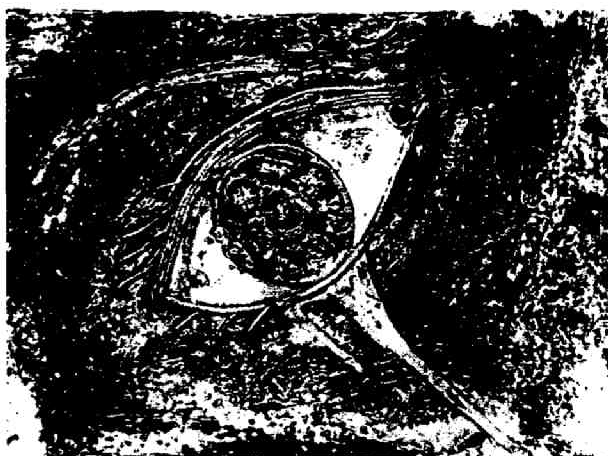
(生徒の作品から)



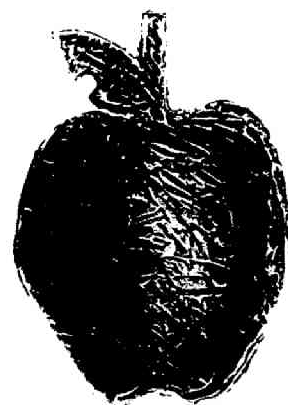
「あふれる幸せ」



「人間のストレス」



「絶望と拒絶」



「長崎の原爆に対して、りんご一つでさえも…」

3 考 察

鑑賞は少し難しい内容であったが、生徒は質問しながらプリントの問いを真剣に考え、内容を理解していった。制作では、版制作に各自さまざまな工夫をこらし、刷り上がった作品の多様さに驚かされた。生徒は自分のメッセージや感情をいかに表現していくか、悩み考えた。描画の授業では自分の考えをうまく表現することができなかった生徒も、今回は思い通りに表現できたようだ。

今回の授業を通して、生徒が身の回りや世界で起こっている事柄についてより関心を持ち、それらに対する自分の思いや考えを表現していく一つの方法を会得できたら良いと思う。

最初の授業 ——美術の授業の導入として——

1 題材設定の理由

本研究校は、おとなしく真面目な生徒が多く、自分の考えを積極的に表現する生徒は少数である。美術の授業でも、思い切った自己表現をしようとする意欲の見られる生徒は少ない。

本題材では、入学して最初の授業で今までのものの見方に揺さぶりをかけ「描くこと」「表現すること」についての理解を深めることをねらいとした。造形的な遊びの要素を加え、楽しみながら「描くこと」を別の角度からも改めて体験し、今までと違ったものの見方を認識させたいと考えたのである。これからの授業で、自らが主体となって自己表現をしていくための動機付けとなると考えた。

2 展開例

- (1) 指導のポイント 制作を通して次のことについて考えることを大切にした。

- | |
|-----------------------|
| a 手のはたらき |
| b 目のはたらき |
| c 脳のはたらき（記憶・感覚・思考・感情） |

生徒の興味を引き出すための作業とクイズを組み合わせて流れを組み立ててみた。

- (2) 指導の実際

- ① 最初の授業、挨拶・出席確認呼名の時にひと言の言葉かけを工夫する。（コミュニケーション）
- ② 今日の授業について説明。『最初だから少し遊んでみましょう』という声かけで期待と不安を高める。
- ③ B4更紙配布。用紙を横位置にして3等分に折るよう指示する。
- ④ 用紙左側のスペースに手を描くように指示。
筆記用具・ポーズは自由。約10分。
- ⑤ 用紙中央のスペースに、筆記用具を持ち替えてもう一方の手を描くように指示。約10分。
- ⑥ 用紙右側のスペースに、今描いた手の形を思い浮かべて目をつぶって描くように指示。約5分。

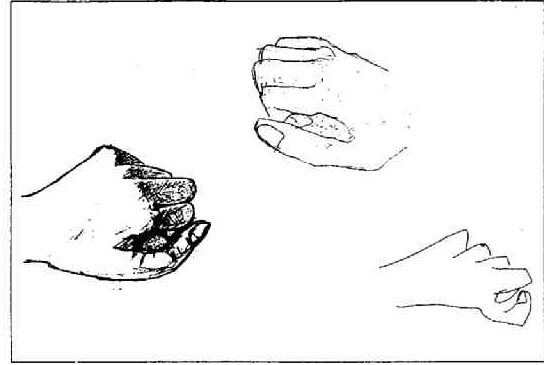
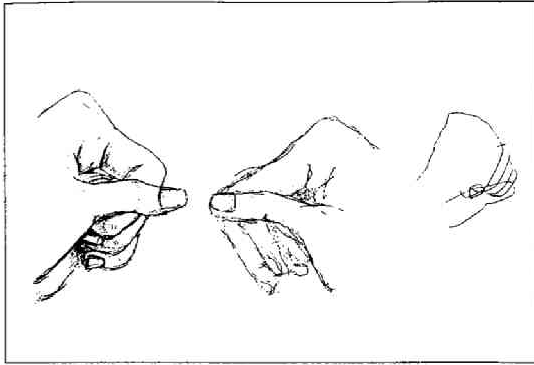
→ a 手のはたらき

→ a 手のはたらき

→ b 目のはたらき

<ここまでのまとめ／指導の工夫>

- ・ 実際にできた作品を見える。となりの人と交換して見る。
- ・ ふだん何気なく使っている「手」と「目」を使わないとどれだけ描きにくい確認
- ・ ただ、どちらもまったく描けないわけではなく、逆の手で描いたものや、目をつぶって描いたものも、となりの人とは違う個性が出ているということを示唆する。



〔障害のある作家の作例を説明〕

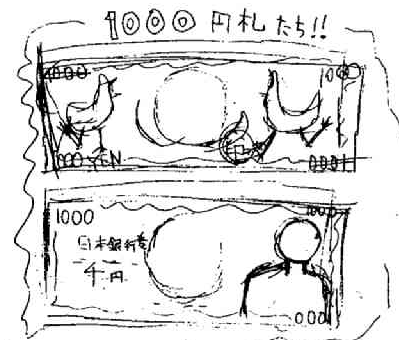
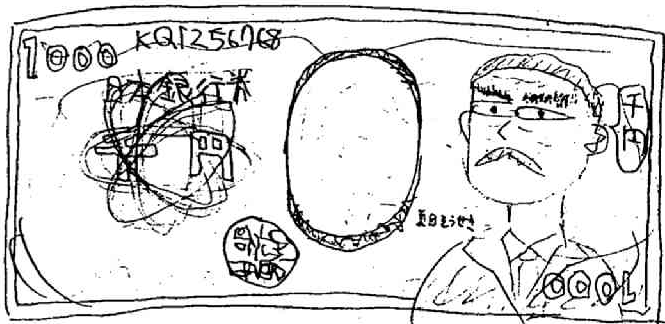
肢体不自由で口を使って描く画家（星野富弘）、視覚障害のある彫刻家（1904年以降のドガ）など、障害がありながら作品制作している作家の例を話す。

- ⑦ 先程の更紙を裏返しにする。そこに『誰でも知っていて身近なもの』を「記憶」だけで描いてもらうことを話し、それが何なのか当てさせる。
- ⑧ 『正解は1000円札です。』と告げる。表側と裏側を並べて描き、全体の大きさ、図案の配置などを正確に思い出して描くように指示する。カンニングしないように注意。約10分間。
- ⑨ 途中でヒントを出す。誰の顔だったか、1000の字はいくつあるか・・・など。
- ⑩ 正解（本物の1000円札）を見る。（誰も持っていないテーブルがあったら貸す。）
大きさ、横縦比、1000の字・人物の配置など確認。

→ c 脳のはたらき
(記憶)

<ここまでのまとめ／指導の工夫>

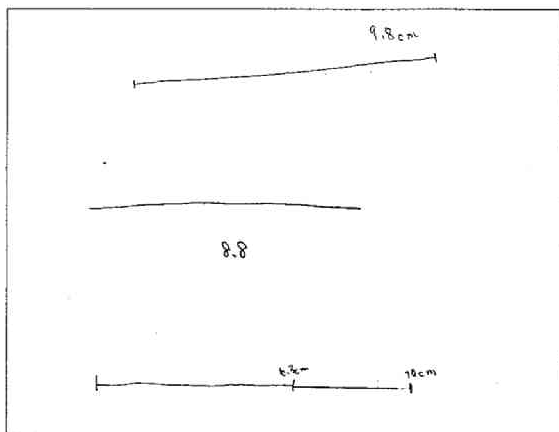
- ・ 1000円札の特徴をとらえて描くのが難しかった理由を問いかける。
- ・ ものを見る時、なんとなく見ているだけではあいまいな記憶しか残らない、真剣に見て心に焼き付けないと描くことはできない、というようなことを示唆する。



- ⑪ 生徒を一人立たせる。他の生徒に彼の身長を当てさせる。誰かから声が上がったら、その数字を中心に『～cmと思う人?』と聞いて、全員の予想を黒板に集計する。
- ⑫ 立たせた生徒に正解を発表してもらう。正解者がいたらみんなで拍手。誤差 5 cm 以内 (約 3 %) の人が何人いたか確認しておく。
- ⑬ 次に先程の紙を裏返して机に広げ、そこに 10cm の直線をフリーハンドで描かせる。
- ⑭ 定規を配布し、描いた直線の長さを測る。どの辺も身長と同じ誤差 3 % (9.7~10.3cm) の範囲に入っていたら正解とした。

→ c 脳のはたらき
(感覚)

→ c 脳のはたらき
(記憶)



<ここまでのまとめ/指導の工夫>

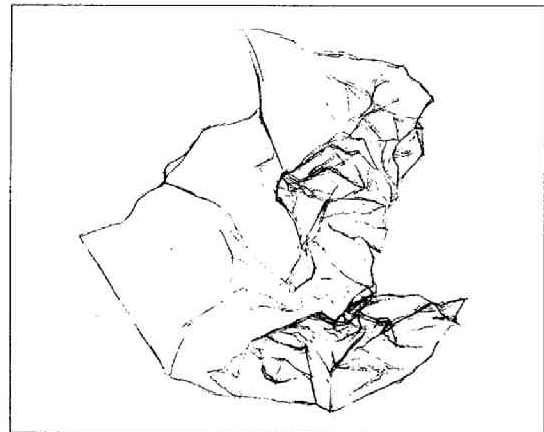
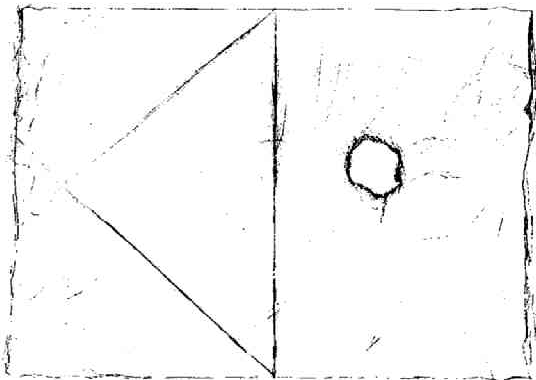
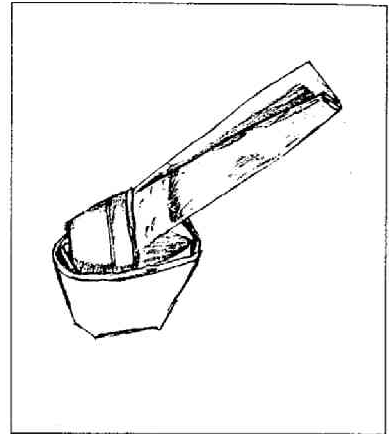
- ・身長は、ほとんどの人が誤差 3 % 以内で当てることができたのに、直線だと分からないのは何故だろうか問いかける。
- ・日頃から興味をもって見比べたり測ったりしているものに関しては「感覚」が鋭くなるが興味のないものに関しては「感覚」が曖昧になる。他の例も挙げて説明する。
- ・美術の授業では「感覚」を磨くようなトレーニングが必要である。

- ⑮ 2 枚の紙 (B 4 上質紙) を配布
- ⑯ 「1 枚の紙にもう 1 枚の紙を描いてみましょう」と問い掛ける。どうやって描くか考えさせてから説明する。
- ⑰ 描くのにこまっている生徒に。「切る」「破る」「折る」「まるめる」「広げる」「貼る」などの工夫をする。工夫の仕方一つで、紙の表情が変化し、性格のある生き物のように見えてくる。それらのことを実例を示しながら説明する。
- ⑱ 作業開始 (約 30 分)
紙にしわを作り過ぎて失敗する生徒が多い。やり直しを何度か試み発想を高める。セロテープ、糊などを使って工夫する。

→ c, 脳のはたらき
(思考・感情)

<ここまでのまとめ／指導の工夫>

- ・ どんな作品ができたか席を自由に移動してみんなで見る。
- ・ 席に着いた後、特にユニークな発想のものを紹介する。
- ・ 一つの簡単な素材が、受け止める人間によってまったく違う作品になることを確認し、作品を制作する際の脳のはたらきについて考えさせる。
- ・ この時間にやった「手」「目」「脳」のはたらきについてまとめ、これからの授業でそれらをはたらかせて自分なりの「表現」をしていってほしいというまとめの話をする。
- ・ 次週からの予告をして終了。



3 考 察

この題材を始めて3年目になった。最初のうち、生徒の反応は不安で恐る恐るだったが、明るく語りかけることで楽しげな雰囲気をつくれるようになり生徒の反応も積極的になってきたしかし、いくつか問題点もある。

- ・ 「手」「目」「脳」のはたらきについて、理解したかの確認が十分にはできていない点。
- ・ 「脳」のはたらきについてのクイズや実習については、流れをスムーズにするため毎年工夫しているが、今後も改良の余地がある。
- ・ 「手」「目」のはたらきの実習では、障害のある生徒への配慮を検討する必要がある。
- ・ この授業で美術の授業への期待が高まった雰囲気はあるが、次の授業への展開がうまくいかない。「表現」に必要な技術ということでデッサンにつなげているが、そこで興味を失ってしまう生徒が出てきている。

美術の教員は授業の中で「自己表現」の大切さを指導しているが、学校生活の場面では、教師として、時に生徒の自己主張や自己表現を規制することも多い。また当の教員自身も、教育者としての「自己表現」ができなくなっている。美術の授業で「自己表現」の必要性を説いても、このような状況の中では生徒も教員も空しさを感じてしまう。「自己表現力を高める授業の工夫」とは、学校のあり方考えることではないか？ 本研究を通じ、そのようなことを考えさせられた。

「自己を見つめる」——ブックカバーデザインとポスター制作を通して——

1 題材設定の理由

本研究校には、中途退学や不登校の経験のある生徒が多く在籍している。それらの生徒の中には、自らに自信が持てずに、不安感を抱き日々生活している者も少なくない。

このため美術の授業では、情操の涵養と共に、自己表現力の伸長を重要視している。本研究では、自分をテーマとした視覚伝達デザインの制作を通して、内在する自己を見つめ、各自の思いを引き出し、表現することをねらいとした。

視覚伝達デザインの制作では、何を伝達したいのかを明瞭にしなければならない。テーマを「自分」と設定することで、自分をどのように捉え、伝達するのか考えることが必要となる。生徒一人ひとりが自己について考え、表わすことにより、各自の価値観を形成する一助となればと考えた。

授業研究では、ブックカバーデザインの制作を通して自己について振り返り、ポスターの制作によって、これからの自分について考える足がかりとすることを目指した。

2 展開例＜課題1＞

(1) 題材名；「自伝のブックカバーデザイン」

(2) 課題の内容；自分の自伝本を各自仮に考えて、その本の表紙カバーをデザインする。
(自伝本を実際に執筆するわけではない。)

(3) 課題のねらい

生徒各自がこれまでの自分を見つめ、受け止め、自己の形成過程を振り返ることを意図した。

(4) 設定条件

本の大きさはA5判を基準とし、生徒持参の既製の本に完成したカバーを装丁して提出する。題名、出版社名、著者名（生徒氏名）の文字を画面内に入れることとした。制作材料や描画材は各生徒の意図に応じて工夫するよう指導した。

(5) 対象生徒・授業時間；美術Ⅱ受講生徒、2講座計33名を対象に14時数で実施した。

(6) 指導の実際

段 階	時	主 な 学 習 活 動
導 入	1	課題内容の十分な理解をする。ブックカバーのデザイン作品を鑑賞する。
展 開	2	B5判プリントに自伝本の内容設定を行う。題名、出版社名、目次、粗筋の各項目を文章で記入する。
	3	各自内容設定を基にカバーデザインのアイデアスケッチを重ねる。
	7	各材料で制作を行う。完成した作品には透明保護シールを貼り付ける。
まとめ	1	講評会で、自分の作品の紹介を行うとともに、他人の表現意図を理解する。課題を振り返って感想文を記入する。

本の内容設定に苦勞している生徒には、以下のような示唆を行った。

- ・ 整理して、まとまった本の内容にする必要はなく、現在振り返れる範囲で考える。
- ・ 過去のささやかな出来事や、自分とつながりのあった物などを題材にするのも良い。
- ・ 自分の全てをさらけ出す必要はなく、抽象化したり、象徴化した物語を設定するのも良い。

(7) 感想文から

自伝本内容設定粗筋から

- 家に帰ると心が浄化されます。私にとって家や家族は浄化槽のようなものです。そして元気になった私はまた学校へ行きます。その毎日を自伝本に書きます。
- その時その時で大切だった曲、題名を聞くだけで涙が出ちゃうような思い出の強い歌を時間順に並べて、一曲ごとに象徴される情景、出来事を書く。その時にはすごく強烈な経験でも全て泡のように消えてゆく。それでもその歌のメロディーはずっと胸の中に残るし、思い出も消えない。悲しみは目をそらすことなく胸の中心に据えて、何があってもまた再び歩きださなくちゃいけない。歌は、音楽はいつでもそばで支えてくれる。
- 私は今まで眠っていた。あんな沢山の辛い事も、あの悲しい出来事も、そして愛に包まれていると思っていたあの頃も。それらは全て美しく優しく幸せな夢だったのか。今はまた違う夢の世界にいるのかもしれない。美しかったあの夢の世界へは戻れない。今は新しい別の世界で、新しい世界の時間をすごしている。

◇自伝本というとても個人的になってしまうし、曖昧な表現もできず、初めはどこまで自分を出せばいいのか（出せるのか）戸惑いはあったと思う。

◆この課題をやり始めるまでかなり悩んだし、授業に出るのやめよっかナーとまで思ったんだけど、この課題じゃないと、こういう激しい絵は描く機会がなかったからまあ楽しかった。でもマジ「オニツ＊」って思った。

◇夏休み中は、この課題のことを考えて憂鬱となり、最悪という日も多かった。が、実際の作業に入ると、熱がこもった。

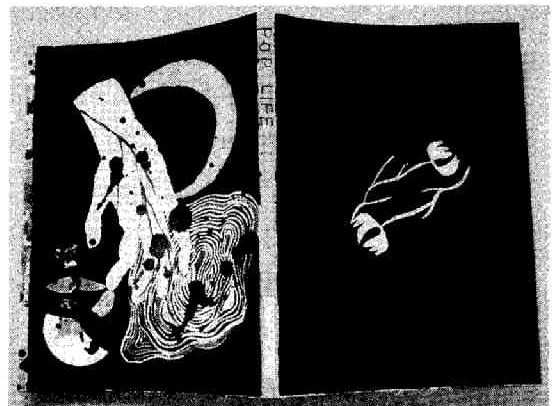
◆難しかった。とにかく、連続的に発想を要求される課題で、頭がつかれました。

◇実際の出来映えと、思い描いていたのでは違う感じもするけど、満足はしている。完成したことより、その過程の作業が良かったと思うから。

◆過去を思い出したからこそ、今後頑張ろうと思った。

◇過去を美化するのでもなく、卑下するのでもなく、まっすぐ見つめることを学んだ。

◆この課題は、自分が直面している世界との関わり方を考える上での土台になってくれた。



3 展開例＜課題 2＞

(1) 題材名；「自分にとって大切なもののポスター」

(2) 課題の内容；各生徒にとって大切なものを広告ポスターの形式で表現する。

(3) 課題のねらい

自分にとって大切なものを認識し、他者への伝達を考えた客観的な表現を通して、自己探求を行う。

(4) 設定条件

広告物名、広告主名、キャッチコピー、ボディコピーを画面に挿入することとした。8 切判の大きさとし、制作材料や描画材は各生徒の意図に応じ工夫するよう指導した。

(5) 対象生徒・授業時間；課題 1 に同じ

(6) 指導の実際

段 階	時	主 な 学 習 活 動
導 入	1	デザインの分類や歴史の概略を学ぶ。課題内容の十分な理解をする。
	2	基本的な発想の手順を理解する。発想ワークシートの記述を通して、どのような広告物とするか検討する。
展 開	4	商業広告ポスターとコピー表現の類例を知り、その役割や表現方法を理解する。クロッキーブックで図柄とコピーのアイデアスケッチを重ねる。
	6	レタリングの基本技法を理解する。各材料で制作を行う。
ま と め	1	講評会で自分の作品の紹介を行うとともに、他人の表現意図を理解する。課題を振り返って感想文を記入する。

発想ワークシート：発想・構想を容易にし、見方を広げるために、発想ワークシートを用意した。生徒は初回にワークシートに記入し、広告物設定の参考とした。

STEP 1・「今の私にとって大切なもの（ひと、こと）」を見つける。

↓ ☐ 大切なものをいくつか挙げ、大切な理由を書きましょう。

STEP 2・STEP 1 の案から 1 つを選び「大切なもの」を広告する題材に置き換える

■ STEP 1 で選んだ「大切なもの」を商品に置き換えると何になりますか

↓ (大切な物が「家族」の場合：こたつ、ワゴン車、思い出の品、等)

↓ ■ 選んだ「大切なもの」に関係する団体や施設を思いつく限り書いてください

↓ (大切な物が「家族」の場合：住宅、遊園地、国民宿舎、等)

■ 選んだ「大切なもの」を意見広告にするとどうなりますか。

(大切な物が「家族」の場合：政府広告「家族と一緒に完全週休 2 日」等)

STEP 3・STEP 2 の案から 1 つを選び、他の題材で広告できないか更に検討する。

☐ STEP 2 で選んだ広告物を似たものに喩えてみましょう。

(広告物が「こたつ」の場合：「テーブル」「電気カーペット」等)

☐ 選んだ広告物と関係のある物を対象としてみましょう。

(広告物が「こたつ」の場合：「みかん」「家庭麻雀」等)

その他、拡大・縮小、省略・分割、反対の性質、組み合わせ等の項目で検討する

「大切なもの」を具体化、明確化し、他者に的確に伝達するためにキャッチコピー、ボディコピーを考え、ポスター画面内に入れることとした。

生徒作成のポスターから

●大切なもの：「コミュニケーション」 広告物：「電話」
コピー：I' LL ALWAYS LOVE YOU
どんな出会いも、どんないのちも、永遠に続くものはないから、いつもいつも気持ちを伝えることが大事。

●大切なもの：「おいしい食べ物」 広告物：「弁当屋」
コピー：おいしい！たのしい！

小さいころから、芋ほったり、おままごしたり、アイスクリーム食べたりいろんな楽しいことをしています。大きくなったら、“おいしいものをつくる”という楽しいことも知りました。そしてやっぱり小さいころも大きくなっても“おいしいものを食べる”って楽しいんです！ おいしいお弁当有り☑。



(7) 感想文から

◇テーマがポジティブな内容だったので、考えてて楽しかった。

◆ポスターという形態は、見る人を前提にして作るから、そこが難しかった。独りよがりではなく、広告したいものを明確にしなくちゃいけないから。

◇自分で普段ぼんやりと感じていることを、具体的なものにすることで再確認できた。

◆自伝本デザインで過去を見直すという作業が、自己データの再確認となり、今回はそれをふまえて発想できた。

4 考察

2つの課題では、自己を観察し、考える行為を重視した。生徒の思いを汲み取り、各自が考えるきっかけを提示できるよう努めた。

ブックカバーデザインでは、自伝本というテーマがストレートすぎて、発想、構想で苦慮する生徒が少なかった。生徒は制作の過程で自己と向き合い、試行錯誤しながら作品にできたと考えている。

ポスターデザインでは、それぞれの生徒が複数の「自分にとって大切なもの」を持っており、意欲的に制作できた。しかし、「大切なもの」を広告物に置き換え、コピーを付けて、他者にわかりやすく表すことに苦勞する生徒が多かった。「大切なもの」がなぜ、どのように大切なのかを客観視する作業を通して、自己探求はより深まったと考えている。

各自の思いを的確に表すためには、表現技術の更なる向上も必要であると感じた。より効果的で、説得力あるデザインを目指して、技術指導を充実していきたい。

V 研究のまとめ

1 授業研究のまとめ

本研究では、各学校の生徒の実態も踏まえて研究を進め、自己表現力を引き出し、さらに新たな自己表現へと発展できるような授業の工夫をし、次のようなことが分かった。

- (1) 「ピンホールカメラ」を使った題材では、映像と見ることの違いを理解できたが、それとともに映像表現の可能性を生徒自身が発見し、次なる表現への意欲を培えた。
- (2) 「鑄造」では、生徒とともに材料や用具を吟味しながら授業を進めた。つくりながら考え、創意工夫することで、他の題材よりも成就感を持てた。
- (3) 「コラグラフ」では、社会に目を向けさせることをねらいに鑑賞と表現を一体的に学習しようと工夫した。相互が効果的に作用し、生徒が悩み・考えながら作品に取り組めた。
- (4) 「最初の授業」では、生徒のものの見方が変わるよう工夫している。作品制作というより自他の表現の違いに気付くことが大切であるが、その後の制作への糸口として効果を上げている。
- (5) 「自己を見つめる」では、最近の生徒のこころの問題にあえて焦点を当ててみた。言葉とは違った美術の表現には、自己の思いを込められるよさがあると分かった。

2 「自己表現」と「評価」について

現行の観点別評価は、絶対評価の高等学校では定着していると言える。しかし、自己表現を評価するには、観点をより明確にする必要がある。次に、本研究から分析した評価の観点をまとめてみる。

関心・意欲・態度	○自らが主題を把握し、主体的かつ意欲的に学習しているか。
発想・構想の能力	○想像や考えを形や色等で具体化できているか。
創造的な 表現の技能	○意図に合った表現方法及び材料・用具を選択・活用しているか。 ○創意工夫する力や応用力が身に付いているか。
鑑賞の能力	○作品にこめられた作者の思いを感じ取る、説明できるか ○鑑賞から表現活動へと発展できるか

3 今後の課題

何もないところから、新しい発見や発想をすることは専門家や研究者でも難しい。生徒が自己表現を高めるためには、その基礎となるものの見方や観察力を身に付けるよう、様々な授業の工夫を考える必要がある。本研究では解決策を授業の中から見つけ出そうと試みた。多くの生徒に変容が見られた研究、一人一人の心に訴えられ手応えを感じた研究となった。しかし、表現と鑑賞の活動は、将来の社会で生徒が生かしてくれてこそ価値がある。生涯学習の基礎を培う観点からも研究を深める必要がある。